

【氏名】金 玟廷

【所属大学院】(助成決定時)

東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻

【研究題目】

西洋文物の導入による接見・接客の空間と室内意匠の変遷に関する研究  
－ 韓国の王室建築を中心に－

【研究の目的】

西欧列強が東アジアまでその勢力を伸ばした 19 世紀中期、韓国(当時朝鮮)にもその影響が至る。欧米や日本との交渉による社会的・文化的変化は、あらゆる面で既存の伝統文化に影響を及ぼし、建築においても多くの変化が起きた。このような西欧からの様々な社会的・文化的影響を受けた朝鮮における、本研究は西洋風の接見・接客文化の導入により影響に着目する。

西洋風の接見・接客の文化は、外国人と接する機会の多かった王室の人々の意識と風俗に最初に浸透し影響を与え、そしてこのことが建築空間にも大きな変化をもたらしたと考えられる。また、接見・接客の建築空間には、自国のアイデンティティを示し、また相手のための配慮が現れる場所でもあると考えられる。したがって、異文化についての相互の影響がさらに大きくなり、接見・接客空間に限らず他の建築空間にも十分影響を与えたと予想される。

そこで本研究では、王室の西洋風の接見・接客空間において必要とされた行動やマナー、建築的形態がいかなるものであったかを考察し、これが韓国の開港期の接見・接客空間の建築・意匠にどのような影響を与えたかを分析することを目的とする。

また大きな意味で韓国の近代建築においてどのような役割をしたかについても考察する。

【研究の内容・方法】

研究方法は、1.王室の記録文書 2.当時の雑誌、新聞、官報、外国人の見聞録など 3.写真、絵画、葉書、切手などの当時の状況が分かる視覚資料 4.新しい材料、西欧の家具と工芸品の輸入や取引そして外国商社などに関する資料 5.工業製品や建築材料の生産と輸入に関する資料 6.当時、韓国で活躍した西洋人、開化派、建築家に関する文献資料 7.対象とする建物のうち現存するものについて現地調査などである。

本研究では、韓国の宮殿の中で開港期に主に使われた景福宮と徳壽宮を研究対象にする。

景福宮での国賓の接見・接客は、当時高宗の居所であった乾清宮及びその周辺の建物で行われた。接見所の中伝統的な建物では乾清宮の長安堂、集玉齋、寶賢堂、咸和堂、緝敬堂、興福殿があり、景福宮の唯一の西洋建築であった觀文閣も行われた。そして待機室及び饗宴所の内部は洋風インテリアと家具が導入され、徐々に西洋風に変化することになる。

景福宮の場合は他の建築より古い歴史を持ちながら、強い王権を誇示した宮殿として、その伝統建築を維持しようとする意志が強く現れた。しかし、このような宮殿建築に接見・謁見のための洋

風様式が存在したこと、そして内部が洋風になって行くことから、外国人との接見・接客が当時の政府において重要な行事であったと考えられる。

徳壽宮(慶運宮)での接見所は、咸寧殿、九成軒、徳弘殿、大猷齋、環碧亭、靜觀軒、石造殿、重明殿(漱玉軒)、惇徳殿がある。徳壽宮は景福宮より洋風の建築は多く建てられ、さらに単に謁見のための洋風建物まで建てられるようになる。

徳壽宮での西洋化は接見所に限らず、先祖を祭ることや大葬の礼、そして嘉禮(結婚式)などの宮殿の行事が行われた。これは西洋化された空間がすでに王室の生活に浸透されたためと考えられる。

最後に今日の迎賓館の役割を果たしたと言えるソントクホテルは、接見・接客所が西洋化になっていくことを明らかに表す建物であると考えられる。

#### 【結論・考察】

開港以降、韓国建築において西洋化は王室建築から始まることになる。それは日常生活が行う空間ではなく、外国公使を始め欧米諸国の外国人を接見・接客する空間である。

景福宮では、觀文閣という洋風建築が存在したが、全的にそこで接見・接客が行わず、伝統の王室建築でも度々行われたことが分かった。伝統皇室の空間の場合は、洋風のインテリアと家具が導入され内部空間から西洋化になって行くことになる。徳壽宮(慶運宮)は、伝統空間の場合は景福宮と同じように洋風のインテリアと家具が導入されたことであるが、謁見だけのための洋風建築が建てられたということが特徴である。

このように韓国王室において接見・接客所は、韓国伝統と洋風の建築が共存し、ある面では国のアイデンティティを示し、ある意味では欧米諸国の文化を配慮しながら折衷していたことが分かる。